ルマユリやその他名の知らぬ美しい高山植物が咲き誇る道がしばらく続く。御伽平のあたりからウグイス鳴く森林に入る。幻想の水晶池に立ち寄り高天原に出たのは8時頃だった。正面に黒部を隔てて薬師の雄姿が実にすばらしい。氷河時代を忍ぶ見事なカール、そして愛大生をのんだ南東稜がこちらにのびている。やはり薬師はデッカイ山だ。岩苔山荘に寄り事情を伺う。赤牛沢、口元のタル沢等を横切り東沢出合まで黒部川に沿って路が通じているとのこと。黒部もこれでまた少しその神秘性を失った。日本のすみずみまで人が通い、狭くなる。愛すべきこの国の開拓的登山がいよいよ行き先を見失う。アルプスが何人にも汚されず永遠の姿である様に祈らずにはおれない。ゆっくり昼食をとり、温泉沢から夢ガ原に至る途中左に降る。赤牛沢源頭のガレが見える。尾根道を少し行くと奥のタル沢の支流に出る。岩苔小沢の水量はかなり少い。この沢を降って黒部川本流に出る。出合に岩小舎を見つけ長い昼寝を楽しむ。夕方釣師の増瀬が5～6尾ぶらさげて帰って来た。

時間　岩苔乗越6:40　岩苔山荘8:00－9:00　出合10:15

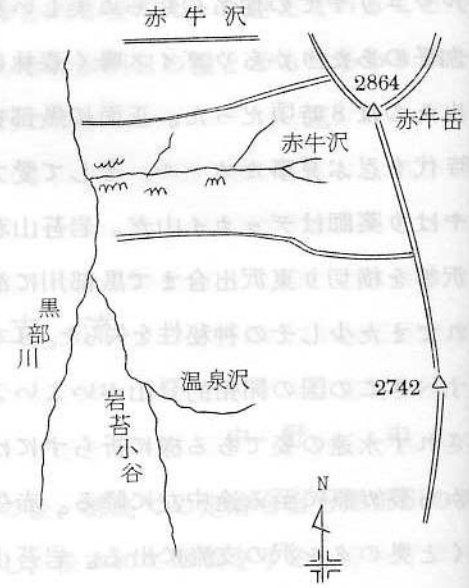
8月5日　晴れのち快晴

赤牛沢の本番である。岩小舎から右岸10分位で赤牛沢出合に着く。黒い大きな角岩が突き出ていてルンゼ状になった出合である。5～7mの小滝が3段続いて現われる。難なく沢筋を溯る。しばらく平担な沢が右へ少し折れ、やがて15m程のナメ滝が落ちている。結局このあたりからしばらくがこの沢のクライマックスとなり、私達が夢想した沢はどこにも見当らない。簡単にシャワークライミングで越せば縦走路に出る。後の薬師と足元のリンドウだけが私達をなぐさめてくれる。昼食をすませ、沢筋をさらに詰める。小さな滝が段々状に続き、1～5mの小滝を5段通過すると水が切れ、ピークまでガレ場である。ワラジを捨て3人横に並び登る。期待を裏切ったこの沢は最後のガレ場で私達を苦しめる。ピークで正午になった。水晶岳の雪田をめざしたが途中にりっぱな雪田を得たのでそこに泊る。

時間　岩小舎6:30　出合7:20　赤牛岳12:00　雪田3:30

8月6日　晴れ

水晶岳でたっぷり時間をかけ、冬山候補ルートの湯俣尾根を偵察する。変化に乏しい長い尾根だ。下半分の森林帯を過ぎても後半は大した困難もない様に思う。テントは水晶岳まで進めなければならないだろう。三俣蓮華で上ノ廊下隊を待つ。夕方久し振りに夕立があった。



8月7日　晴

下山。小屋に寄り湯俣へ向う。濁沢出合にて泊る。

8月8日　晴

濁沢出合から大町へ。

2. 小黒部谷・大スバリ沢・黒部別山（1967年7月）

宮本義海

内蔵ノ助谷出合をB.Cとした黒部別山東面での活動を行なうにあたり、B.C集結を、①片貝川東又谷－平抗乗越－小黒部西谷－小黒部本谷－ハシゴ段乗越、②マヤクボ沢－大スバリ沢－黒四ダム、③小又川右俣－立山－御前谷、④宇奈月より下ノ廊下ルート、の四パーティ分散入山とした。内蔵ノ助谷出合のB.Cは営林署の要請により、途中から剱沢二股に移した結果、黒部別山東面の活動に時間的制約を受け、別山沢右俣、中のガビン沢、大タテガビン沢、広河原中央ルンゼ、左ルンゼに踏跡を残したにとどまった。黒部別山の踏査終了後、櫟平より二隊に別かれて、小黒部谷の中谷と折尾谷を溯行し、片貝川南又谷を下る予定であったが、長雨に会い、3名が折尾谷を溯行、ブナクラ谷を下ったに